

琉球大学学術リポジトリ

豚の飼いを改めましょう

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石垣, 長三 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20013

ベンゾールに溶けるので、油性ワニス・エナメル製造に用いられる。ニトロセルロースにも混溶性があるのでラッカーの製造にも用いられる。強靱で耐候性・耐油性に優れた塗料である。低温では乾燥が遅く、100°C前後で焼付塗装する。

市販品約一七〇種あり。
7、其他

アクリル酸樹脂塗料

ポリウレタン樹脂塗料 等

(岸 本 幸 安)

豚の飼い方を改めよう

沖繩の養豚は、戦後多くの優良品種をとり入れたため、豚のもつ経済能力という質的面においては、極めて著しい向上をみせていて、郷土の基幹家畜としての重責を果していることは非常に喜ばしいことです。その反面飼いは依然として戦前と変わりがないといわれることは、甚だもつて残念なことでもあります。そもそも家畜の能力というものは、それぞれの品種によつて相違があるものですが、さらに飼い方如何によつても能力差がでてくることは、永い飼養経験をもたれる農家の皆さんには十分おわかりのことと思います。従つて能力が高ければ高い程、それ相当のよい飼い方をしなければ、玉も遂には瓦のようなものになってしまうことになり、農村をまわつていると、よく飼育者から、この豚は〇〇から無理して入手した血統のよい豚で、将来を楽しみに飼つていきますと、自慢話を聞かされることがあります。が、その飼い方をのぞいてみると、純粹種よりはむしろ在来でも飼つた方が、この人には無難ではないかと思われようなことにたまたまあいます。こういう飼育者の頭の中には、能力の高い品種を飼わねばならないという新しい考えと、他方

ではどういふ飼い方でも、能力の高い豚は高いなりに、より望ましい経済的貢献をしてくれるのではないかという、非科学的な古い考え方が同居しているのではないかと筆者は思っています。こうした考え方は、豚からいわしむれば甚だ失礼千万のことでも、もし彼に言葉という便利な道具を神が与えて下さつたら、おそらく毎日ブー、ブー不平をこぼすことでしょう。そこで従来飼い方を反省しながら、今後の改善策を考えていただくために、筆者が学生と一緒に実習で見聞したことがらを骨子にして、飼養面の二、三の問題点をとりあげ、養豚家の参考にすることにします。

一、蛋白質飼料に対する関心を深めてもらおうと共に、その利用方法について工夫してもらいたいというのが、第一にとりあげたい問題です。蛋白質は大豆粕、魚粉、落花生粕等に最も多く、ふすま、糠類にも一五―一六パーセント位含まれています。又米軍の残飯には日本の例によると二〇―三〇パーセント含まれておるようです。ところが沖繩の養豚飼料である甘藷や甘藷蔓には僅かに一―二パーセントしか含まれていないんです。豚は一体どの位の蛋白質があれば血や肉をつくつて、

生長、生産を続けることができるかという、年令や肥育又は繁殖という飼養目的によつて、相違がありますが大体一〇―二〇パーセントはなければならぬことになっていきます。そうすると甘藷だけではどうしても豚の必要とする蛋白質の量を補うことができないことはだれでもなつとくがいくと思ひます。従つてそれを補うためには大豆粕、魚粉、落花生粕等を配合してやらねばならないわけですが、しかし残念なことに養豚農家では蛋白質飼料を利用しておるところが極めて少なく、ひどいところになると、大豆粕のような高価な飼料は肥育牛には利用しても、豚には勿体ないといわれる人がでてくる始末です。こういう考え方は豚の能力があたかも神の如き創造力をもつたもののようによつて過信している結果によるものではないかと思ひます。従つて与えずとも肥るといふ、神がかり的な考えを捨て、飼養上なつとくのいく、科学的飼い方をするように努力しなければなりません。蛋白質のことでもう一つ述べたいことは、蛋白質というものはおもしろいことに、多くの種類を配合利用するほど、単一のものを利用する場合に比べて栄養価が高くなるということです。ですからそのむづかしい理由はぬきにして、私達は可能な範囲でできるだけ多くの蛋白質飼料を配合するようにならなくてはならないわけですね。筆者が見た豚の中で蛋白質欠乏の顕著に現れた一例をとり上げますと、酒粕利用によるある村での養豚があります。ここでは酒粕と甘藷蔓だけで繁殖豚も肥育豚も飼つていました。ところが酒粕というのはカロリー源になる飼料で、肥育飼料としてはなほよい飼料ですが、残念なことに蛋白質の量がせいぜい五―六パーセント位しか普通のものと

はないのです、従つてこれだけでは絶対にやつて行けないわけです、日本々土の畜産試験場で酒粕利用の試験をやつたことがあります、酒粕三割と配合飼料七割を配合して与えた場合には配合飼料だけで飼う豚よりは増体量はふえ、酒粕と配合飼料を五分、五分にしてやつた豚は逆に増体量は減つています。このように蛋白質含量の多い配合飼料を五割利用しても、普通の場合より生育が劣るのに、まして酒粕だけでは正常発育しないのが当然です、筆者は見せてもらつたついでに、どうして蛋白質源になる飼料を配合されないかときいたら、高い飼料を買つては経費が多かかつて不経済だという答へでした。どうもこういう考えは豚の神通力をあてにして、無から有を産みだそうとするもので、これこそまさに不経済的考え方だと思われのです、こういうことをいうと読者の

中では、自分のところもやこれに似ておるのではないかと反省される方が沢山おられると思います、筆者もこういう考え方は一部の人のみでなく農村の人々には大なり小なり、だれでもがもつておられる共通的誤りではないかと思つています。ですから今後は一〇仙使つて二仙もうけるより一五仙使つて五仙もうける方向に考え方を換えていくようつとめましょう、以上は蛋白質の適量給与と配合上の工夫を総ての養豚家が心がけてもらうため、ながなが述べてきたのですが、もし万一これが不足すると、筋組織即ち赤肉の発達がおくれてやせたり、あるいは過肥におちいつて肉質を低下させたり又は繁殖障害をおこしたりすることになります。特に最近では肉豚の香港輸出によつて、いやが応でも東南アジア諸地域の豚と、国際市場で太刀うちしなければならなくなつてきたので、今後はこの面の工夫、改善によつて、外人のし好

に適する赤肉の多い、よい肉をつくることに努力しなければなりません、これこそ生産費低減の問題と共に将来の肉豚輸出の持続性を可能にするこゝとになります。

一、無機物の必要性を理解されて、その適量給与に常に気をくばつてもらいたい。無機物には沢山の種類があつて、それぞれの豚体内における生理上の特性を、種類毎に述べる方が理解を深めるために非常によいのですが、紙面の都合がありますので、ここでは、沖縄での養豚飼料中に特に不足しがちな一、二のものについて、実例をとりあげて述べることにします。先ずその一つに石灰があげられます、石灰は磷と共に豚の体を支える骨格をつくる主成分です、その外豚体の各組織にも少量含まれていて、細胞を丈夫にしたり、病気に對する抵抗力をつけたり、又体液の酸性や苦土、磷酸の過剰を中和して脂肪肥りになるのを防いだりする役目があります、従つて、これが飼料の中に不足すると、くる病（骨が軟かくなる病氣）や脂肪肥り、あるいは抵抗力の減退という結果がおこることになります、このよい例として南部のあるところで、繁殖豚が過肥におちいつて、種がつかないというのに出あつたことがあります、見た目にもなるほど、胴づまりのした丸々肥つた豚で、念のため体尺測定（豚体の各部を測ること）をしてみたら、体長一、三二米に対して胸囲が一、四五米で、胸囲の方が体長に対して一〇パーセントもの數値を示しております、参考のために繁殖豚の正常体形を記しますと、体長に対して胸囲は普通九〇―九五パーセント位です、如何に前記の豚が正常体形をはるかに逸したものであるかわかります、ではこのような豚がどうしてでき上つたかといえますと、その原因は色々あると思ひ

ますが、その中で特に石灰分の問題が指摘されます、この豚の飼料は蛋白質の多い倉庫の残物を利用してはいますが、石灰分の補給は全々なされてい

洗剤のえらび方の基準

織 維	洗 剤	最高温度	洗 い 方	しほり方	干し方
木 綿、 麻	石 け ん 洗 たくソー ダン	80℃	手もみ、板もみ ハケ洗い	手しほり	日 光
レ ー ヨ ン	石 け ん 合 成 洗 剤	60℃	押し洗い 軽い手もみ	押ししほり 軽い手しほり	かけ干し
絹	良質石けん、ふのり 合 成 洗 剤	60℃	押し洗い 軽い手もみ	押ししほり 軽い手しほり	かけ干し
羊 毛	合 成 洗 剤	35℃	押し洗い つかみ洗い	押ししほり	かけ干し
ア セ テ ー ト	合 成 洗 剤	60℃	押し洗い 軽い手もみ	押ししほり	かけ干し
合 成 織 維 ナイロン、ビニロン等	合 成 洗 剤 良 質 の 石 け ん	40℃	押し洗い つかみ洗い 押し洗い	押ししほり	かけ干し

(註) 硬水を洗濯用水に使用する場合には石けんは適当でない

(木) おしつけ洗い

洗濯液の中で品物をタライの底に上から軽くおしつける洗い方で、地質のじょうぶな敷布とか毛布、カヤのようなものを洗うのに適しています。足で踏み付けて洗うのも効果的です。

(へ) 振り洗い (6図)

タライの中で布を前後左右に振りながら洗う方法です。スフ、人絹、毛織物では布がのびる欠点がありますが、薄くて弱いものや色のさめやすいものには好ましい方法です。

(ト) たたき洗い (7図)

汚れた部分に直接石けんをぬりブラシの背か手でたたいて汚れを強く押し出す洗い方で、着物のエリやスソ、タビの裏などを洗うのに適します。この洗いは割合に生地や色合を害しないので、人絹やスフなどにも使えますが、直接石けんをぬるときには、あまり強くぬりつけないように注意します。

(チ) ヘラ洗い (8図)

ワイシャツのカフスやカラーのようなスジになつた汚れはこの方法だときれいになります。裁縫用のヘラやこれに似たものを使えます。

本洗いの後のすすぎで特に気をつけたいのは温水を用いて洗った後にいきなり冷水ですすぎを行なうと、ふくれた繊維が洗剤を含んだまま縮んで、いくらすすぎをくり返しても中々落ちません。合成洗剤は布地に残つていても、色が変わつたり、布の組合わせを損ねたりすることはありませんが、石けんを使う場合には、

すすぎの温度も大切です。多量の水で一度だけすすぐよりは数回に分けて洗つた方がよいのは云うまでもありません。

しほり方や乾燥方法は、さきにあげた表を参考にして下さい。ねじるしほり方や日光による乾燥は木綿や麻以外には適しません。

以上洗剤について、それから洗濯の方法について述べましたが、どういった洗剤をえらび、又どういう方法で洗うかということは、洗う物の性質とか汚れの種類、あるいは用水の性質などによつて決められることが大切です。

(石 垣 信 子)

(五頁よりつづき)

れも胃液や血液その他の組織にあつて、消化作用は勿論のこと、その他の生理作用になくしてはならない重要な役割を果すものです、しかし普通の養豚飼料には必要量だけ含まれていないので、どうしても飼料にある程度添加してやらなければならぬことになり、それでは一体どの位与えたらよいかということになりますが、普通体重一〇〇キロ当り一日五〜六グラム位やればよいということになつております、但し夏青草類を多く利用する時には一〇〜二〇グラム位与える必要があります、勿論残飯とか醬油粕等を利用する場合は不必要です、このことが農家ではほとんど励行されていないように見受けられます。

あるところでは、豚の飼料も味づける必要があるのかと、けげんな顔をされる方がありましたが、こういう飼養知識では、豚公もいよいよ浮かばれないと、同情したくなります。

(つづ) (石 垣 長 三)